先生方の休養

倉橋惣三

先生は疲れる。學問を教授する教授達も研究に頭が忙がしいが、小學校、幼稚園の如きたえまなき教育活動にあたる先生方、わけても、小休憩のいとまもない幼稚園の先生方に於ては、その疲勞が容易でない。子ども達が歸つたのち、くたくたになつたからだ、ぼうとするようなあたまを、椅子になげかける日も稀れでない。しかも、先生の疲勞ほどよき保育活動を妨げるものはない。しらず〳〵不精になり、ゆきとどかないことを免れない、われともしらず心のこまやかさを失つて、すさむことば、けわしい顏つきにもなる。常に教育の機會をみのがしてならず、いつもやさしく子どもにふれなければならぬ先生方にとつて、これほど恐るべき敵はないともいえよう。近來の教師論に於て、『研修』といふことが大いに重んぜられる。誠にそうである。然し、あわせて、休養といふことの必要を說くを忘れ得ない。多くの勤勉なる若き人々と永く仕事を共にしたわれ〳〵にとつて殊にそれを痛感する。私はあの人、この人が、もつと働らいてくれたらばよかろうと思うよりは、あの人、この人に、休養の機會をあたえることのすくなかつたことを、思いかぞえずにいられない。

休養に二種ある。ふだんの休養、特別の休養とでもいうものである、ふだんの休養はたえまない仕事のあいま〳〵に、仕事を中斷することのない休養で、いわば一寸したいきぬき一寸した氣の轉換といつた風のことである。これはもちろんなまけ、怠り、ずるけといつた風のことはでない。心の餘裕で心のはりつめを救ふ心理的のものである。あまりむきになりすぎない心のゆとり、そこに咲くユーモアのちいさい花、輕いリズムの羽音といつたようなものがそれである。殊に幼稚園の先生方には、そうした心醒いのちいさい機會が、そこ〳〵にある筈である。疲れが餘りはげしくなつてしまつた心の便化狀態の先生でないかぎり、それはむしろ常のこと〳〵もいえるかもしれない。たゞし心のゆとり（？）と、ひまと、きらくさが多くて、そのほかに、何も持ちあわせていないというのでは別のお話である。

特別の休養というのは、多少とも仕事からはなれる時間をもつて、休養の目的で休養することである。一週間のうち日

曜日はその一例であるが、これがまた、その中で忙しい先生方、家庭の用がたまつている先生方にとつては、しば〳〵休養の時どころではない。その中でも、なか〳〵休養させてくれないし、自分でも休養が急用かと思いながら、日がくれてしまつたりする。つまり休養には休養の意志計畫實行がなくては出來ないのである。休養出來たら休養しよう位のことでは、いつでも、無休養にあぶ〳〵とおいまくられる。それには疲れたから休養するといつた、しようことなしの意味ばかりでなく自分の仕事を一ぱいに仕遂げるために適當に休養しなくてはならぬという、積極的な態度でなければならぬ。例えば毎晩のことながら、無駄な夜ふかしに疲れて、うたゝ寢に快復力の少ない假睡をするのと、しつかりした、明日の活動計畫のために、充分ゆたかなねむりをとるようにする熟睡とのちがいの如きである。

三月の終りから四月のはじめえかけて、いそがしい幼稚園の先生にとつて、私のいわゆる、特別の休養の少しながらも機會があろう。夏にも、冬にも、その機會があるけれども、暑かつたり寒かつたり、のび〳〵と休養できない點もある。春風がほか〳〵と吹く、花がのび〳〵と咲く、鳥がこゝちよげにさえづる。天地休養の時といふも、亦可也である。但し燭をとつて春の夜を更すのや、春眠曉を覺えない寢坊をすゝめるのではないが——それどころか、春の夜には、春の夜らしい靜けさがなくては先生方の高貴なる心を休めるものであるまいし、春の朝には紫におふ春のあけぼのがなくては先生方の清雅なる心を養ふものはあるまいが、せめてゆつくりおやすみなさい。疲れを知らぬ子供らの相手となるわれ〳〵、悲しいかな、疲れをしる、深き用意なくてはならぬのである。

それにしても、特別の休養に就ては、何等かの規定のもとでなくては、勝手には出來ない。このために、學校の規則、また教職公務員特例等に於て、これが考えられる必要もあろう。こまかく具體的に、一齊的に、日や時間を限つて、規定するというのも出來ないことであろうが、たとえば、新法令が教員の研修について强調しておるが半分位のことは必要であるまいか。それに基づいて學校長もすゝんでその便をはかり、教員もこれを合法的に實行し得るようになりたい。こつそりでない朗な休養のために。但し休養も本務のためである休養を要求し得る權利とでもいうべきものは、本務遂行の條件のもとにのみあることである。よく働き、よく遊ぶという言葉はわが國にも昔からある。我々は、外國の教員諸君がよくつとめ、よくみづからレクリエートする實狀をみて敬服した。と同時にそのレクリエーションの機會と便宜のゆたかにそなわつてをることをみて、羨望した。戰敗國の教育者として、とんなことをいう時期ではないとならば止む。しかしまた、疲れのみ多きこの生活現狀のなかで、教育者を正しく働かすためにはむしろ却て、今日こそ、このことを考える必要の多いことをも思う。とにかく、空も地も、レクリエートするこの機會が、先生方のために奪われ、妨げられないように。殊にみづから粗末にされないように。